

春の散策会(散策地／吉良邸跡、回向院他)に向けて
話題提供：赤穂浪士事件の背景である赤穂藩について

第17回卒：圓山壽和(川越初雁会・藤沢周平読書サロン/進行役兼事務局)

1. はじめに／藤沢周平読書サロンの紹介を兼ね

先日、川越初雁会事務局から春の散策会の案内が届いた。今回は来たる6月5日(土)にJR総武線両国駅集合で、忠臣蔵所縁の場所(吉良邸跡、回向院他)を巡ることになっている。

新型コロナウイルスの感染状況下の企画であるが、昨年秋の明治神宮散策同様、参加者の巣ごもり防止も兼ね、心身ともに解す効果が上がることを願っている。コロナ感染防止に配慮しつつ、川高同窓と顔を合わせ、それなりに交遊の場が持てることを楽しみにしている。

川越初雁会内に交遊の場づくりを目指し3年程前に生まれた藤沢周平読書サロン(会員数10名)では、毎回(2か月に1回)、幸すしさんに会場で便宜を図ってもらい、ゆったりとした雰囲気の下、各人が数ページづつ声を出し読んでいます。

一年一冊を基本とし、この一年間は新型コロナウイルスの緊急事態宣言もあり休会も介在したが、この3月、3冊目の藤沢周平著「用心棒日月抄」(新潮文庫)を読み終わった。これまで1年目は「三屋清左衛門残日録」、2年目は「蟬しぐれ」を読んで来た。

小説「用心棒日月抄」は、藩の派閥争いに巻き込まれ脱藩し江戸へ出て来た主人公・青江又八郎が浪人に身をやつし、口入れ屋(今の人材派遣業者)に出入りし糊口を凌いでいく物語である。時代背景は元禄時代で、時としては元禄14年3月、赤穂藩主・浅野内匠頭が江戸城中で高家・吉良上野介に対し刃傷事件を起こしてから、翌15年12月15日、大石内蔵助ら赤穂浪人47人が吉良邸に討ち入り、吉良上野介の首級を手にするまでを置いている。

物語の展開は、1年10か月間に亘る主人公の用心棒稼業の諸相を軸に進行して行く。主人公と赤穂浪士との関わりは、事件勃発の町内の噂話から始まり、続いて覆面をした赤穂浪士集団との出会いがあり、やがて用心棒稼業の依頼主と請負という関係となり、最後は大石内蔵助の川崎宿外れの家での護衛役までの繋がりとなる。

著者・藤沢周平もエッセイで述べているように、当作品は著者にとって初期の自分の鬱屈した気分をせつせと流しこんだ、暗い色彩を帯びたものから、読者の存在に気づいた、ユーモアの要素の入った明るさと救いのあるものへと変化していく転機のものである。

初出が雑誌・小説新潮への短編連載であった文庫本であるが、各章(短編)毎に取り上げる出来事を中心人物／女性の姿も、凜とした生き方や秘めた情念(性／さが)、そして可憐さをなるといふほどと頷かせるうまさで描き出していた。情景に託した叙情性や切れ味鋭い活劇面などもリズムよく、読むものを飽きさせることなく、最後まで引っ張って行ってくれた。

時代背景の下調べも実証力があり、当小説は赤穂浪士事件裏面史とも言われている。赤穂浪士の動向が当時どう見られていたかなど、歴史がしっかりと基盤にあり勉強になった。

そのこともあり当読書サロンの進行役の小生としては、この時代の歴史研究者の著作から関連資料をコピーしサロンメンバーに配布させてもらった。その際、赤穂浪士事件に関して新書等を著している山本博文・東京大学史料編纂所教授の著作を利用させてもらった。

今回、川越初雁会のホームページを活用した話題提供では、山本博文氏の著書「忠臣蔵の決算書」(新潮新書、2012年発行)の中から、赤穂藩及び赤穂藩解体後の藩士の動向について数箇所を引用要約し、この春の散策会に当たっての話題として提供してみたい。

2. 赤穂藩の財政規模、藩士数及びお取り潰しの清算実態

(1) 赤穂藩は5万石の「外様中藩」で年間財政規模は現代価値で20数億円だった

浅野内匠頭が藩主であった赤穂藩浅野家は、現在の兵庫県赤穂市周辺で5万石を領していた。

藩とは、一万石以上の将軍の直臣である大名が治める領地と政治組織を言う概念だが、江戸時代においては「藩」という用語はほとんど使われず、通常は、赤穂藩士ならば「浅野内匠頭

家中」というように表現されている。

全国に藩は270程あったが、10万石以上を領する大藩は全体の約1割しかない。大多数は3万石以下の小藩であり、5万石の赤穂藩は「外様中藩」と位置付けられる。

『浅野家分限帳』という一種の職員録的なものによると、家臣それぞれの禄高と末尾にその総計が書かれている。ここから逆算し、赤穂藩の石高の内訳を推定できる。

▽藩士の給与総額(米換算)…17,836石(年貢高)

*四公六民=収穫高の4割が年貢高のため全収穫高は44,592石余となる。

▽藩の蔵入地/藩当局の収入(米換算)…2,163石(年貢高)

*全収穫高と藩士給与分の収穫高との差・残余分(50,000石-44,592石=5,408石)の4割が年貢収入分となり藩当局のものとなる。

これら石高を「金一両=米一石三斗」と「金一両=12万円」の換算率で直すと、給与分総計が約16億5千万円、藩当局分が約2億円となる。また赤穂藩の場合、塩田からの「運上金(税金)」もあり、赤穂藩の年間の財政規模は20数億円だったことが推測される。

*付記：豆知識/貨幣制度と金・銀・銭の換算比率

当時の貨幣制度については、「関東の金遣い」、「関西の銀遣い」と言われたように、江戸時代を通じて、おおむね東西で通用する貨幣の種類が違っていたが、両者は両替商などによって交換することができた。

金貨は、小判(一両)、一分金、2朱金の3種類で「計数貨幣」であった。両、分、朱の単位比率は、1両=4分=16朱である。

銀貨は、重さを計って通用する「秤量(しょうりょう)貨幣」で、丁銀(ナマコ形の銀塊)が35匁~50匁、豆板銀(小粒銀、小玉銀とも言う)が1匁から10匁であった。

銅貨の「銭」は、寛永通宝一枚が一文で「計数貨幣」である。銭一貫文とは千文のことだが、実際には銭96文を銭差(ぜにさし、銭の穴に通す麻ひもなど)に通したものが百文として通用していた。これを「省百(せいびゃく)」と呼び、銭960文=銀15匁であった。

著者・山本氏は現在と比べ、「金一両(=銀56匁)」を現在価格12万円で計算している。その要因は江戸時代を通じて蕎麦一杯の値段が16文程であるので、現在の価格を480円とした場合、一文は30円位の価値になるとした上、他の物価も勘案して提示している。

(2) 赤穂藩の藩士等は約300名、下級藩士からの討ち入り参加も17名いた

藩制度においては、本来的には、領地や家臣を含めて藩地内にあるものすべてが各大名家の財産であると言える。

だが、すでに幕府が開かれてから百年程が経ち、領地替えにより先祖伝来の地から離れた大名が大半となった元禄当時の観念としては、領地は「将軍から預けられたもの」で、それを大名が治めるのだと考えられるようになっていた。そうした観念があったからこそ、幕府が浅野内匠頭を切腹させたあと、その領地は没収され、結果として赤穂藩浅野家が断絶することになったのである。

当時の赤穂藩の藩士の構成を役職や石高などから整理してみると、上級、中級、下級の三層に分かれていた。

▽上級藩士…家老、番頭クラスまでが入る。また「組外れ」として番頭などの役職は務めていないが、家格が高いが故に中級藩士の役目の馬廻などには配属されない者もいる。

赤穂藩では家老は4人置かれ、大石内蔵助の1,500石が別格で、次席家老の大野九郎兵衛が藩政を主導し650石、江戸家老の安井彦右衛門と藤井又左衛門がそれぞれ650石と800石であった。軍事上の要の番頭を務める奥野将監と岡林杵之助がそれぞれ1,000石であった。その他の番頭3人、組外れ2人も含め計11人の上級家臣がいた。

このうち吉良邸への討ち入りに参加したのは、大石内蔵助ただ一人であった。

▽中級藩士…足軽を統率する役目の「物頭」以下、戦いになれば騎馬で戦う「馬廻」までが、中級藩士である。百石以上の知行取り(知行地を持ち直接年貢を徴収する権利を持つ)であることが、中級藩士の証であった。元禄の頃になると、それは名目だけとなり、ほとんど

の者が実際には藩庫から年貢相当の米を与えられるようになっていた。能力によって藩の実務面で、用人(藩政の事務責任者)、大目付(藩士の監察役)、郡代(領内の農村の行政責任者)、江戸留守居役(幕府や他藩との渉外担当者)、物頭などの要職に任じられた。

赤穂藩では用人が5人、大目付が3人、物頭が8人いた。知行高は、400石から100石の間で50石毎になっていた。これら藩政の中核である物頭・用人・大目付層の16名のうち討ち入りに参加したのは、吉田忠左衛門(足軽頭で200石に役料50石が加わり250石)、原惣右衛門(足軽頭で300石)、片岡源五右衛門(用人・見小姓頭で350石)、間瀬久太夫(大目付で200石に役料50石が加わり250石)の4名であった。

小野寺十内(京都留守居で120石に役料50石が加わり170石)もこの中級藩士層で、堀部安兵衛は江戸給人で200石、その養父の堀部弥兵衛は隠居料20石を得ていた。

こうした中級家臣は147名いたが、討ち入りに参加したのは25名であった。

▽下級藩士…米や金の現物で「禄」(給料)を支給される者を「切米取り」と言い、赤穂藩には123名いた。この層は「中小姓」と「足軽」「小役人」からなり、中小姓という身分は、馬に乗って戦う格式の馬廻(中級身分)と軽装で戦う足軽層の中間に位置している。下級藩士でも侍身分である中小姓に対し、足軽や小役人は士分とはみなされず、最下層の藩士であった。

この層から討ち入りに参加した者は17人と少なからぬ数となった。この層の大高源吾は20石5人扶持で、藩庫から20石の切米支給と扶持米(奉公人を雇う手当で1人当たり1日米5合の割合で支給、旧暦平年354日で1石7斗7升)の5人分8石8斗5升を得ていた。神崎与五郎の場合、5両3人扶持で、5両は6石5斗、3人扶持は5石3斗1升であった。吉良邸前に居を構えた前原伊助や杉野十平次も、下級藩士層であった。

元禄13年3月27日の日付が記されている「播州赤穂城主浅野内匠頭侍帳」によれば、家老4人を始めとして知行取り(知行地を持ち直接年貢を徴収する者)が147人、切米取り(知行地を持たず米の現物を支給される者)が102人、部屋住み(当主の嫡男や兄弟で独立していない者)・隠居が52人、奥様付きが6人、医師・茶道・坊主が35人で、藩士の総計は342人。部屋住みや隠居を除いた正規の藩士は、300人弱といったところである。

「侍帳」には、医者、茶道、坊主など、軍事にかかわらないものの士分である者の名が記されている一方で、足軽などは軍事職であっても身分が低いがゆえに名が記されていない。

討ち入りは、藩の軍事力の中核をなす馬廻ら中級家臣によって担われたが、それでも藩全体の中級家臣に占める人数を考えれば20%に過ぎない。少なからぬ数の下級家臣が参加していることは、知行取りではなくても武士としての誇りを持つものがいたことをはっきりと示している。また侍帳にも記載されないような軽い身分であるがゆえに、かえって武士としての誇りを持ちたいと願った結果が討ち入りへの参加だったとも言えるであろう。

(3) 討ち入りまでの軍資金は藩の「余り金」と瑤泉院の「化粧料」から調達

赤穂浪士の吉良邸討ち入り事件は、これを一つの事業としてみた場合、大石内蔵助をリーダーとする一つのプロジェクト(企画事業)としてみることができる。

そこには、目的とそれを達成するための資金計画が存することになるが、「忠臣蔵の決算書」の著者・山本博文氏は箱根神社に所蔵されていた史料「預置候金銀請払帳」を分析解明し、当事件の経済的側面を描き出した。

▽赤穂藩取り潰しの結果、大石内蔵助の手元には合わせて金691両あった

元禄14年4月19日、赤穂城の引き渡しが無事終わり、その対応にあたった藩士たちも、「勝手次第引き払い候様」にと申し渡されたが、大石内蔵助以下32人は赤穂に残り残務処理にあたった。大石内蔵助が全ての処理を終えて赤穂を退去したのは元禄14年6月4日で、その後、先に退去していた妻子と大阪で合流し、京都郊外の山科に居を構えた。

その時、大石内蔵助は御家再興や討ち入りのために用意した費用(軍資金)として691両を預かっていた。その内訳は、浅野内匠頭の正室・瑤泉院の持参金を塩浜で運用していたものを引き揚げたものの内から300両、残る半分は藩財政を清算した時の余り金であった。

▽赤穂藩の清算時の退職手当として割賦金が出た

赤穂藩のお取り潰しにより、家臣たちは家屋敷から追い出されることになった際、藩士には次の支給がなされた。

まず元禄14年分の知行米、切米、扶持米が支給された。次に藩の財産の処分代金で「割賦金(わっぷきん)」を4月5日に支給した。これは現代でいえば退職一時金である。基本的には石高に応じて支給されたが、低い禄の家臣の困窮を考え、高禄の者ほどその支給割合を減じた。これは内蔵助の主張によるもので、内蔵助自身は割賦金を受け取らなかった。

知行取りには割賦金が高百石につき金18両支給され、切米取りの中小姓組に金14両、下級役人の小役人に金5両、門番の常番人にも金3両2分支給した。更に藩の船や武具などを売却して得たと思われる資金で、4月15日には「足金」として中小姓以上に金6両、歩行組以上に金2両、小役人に金1両が支給された。

これら「割賦金」と「足金」の合計総額は、金5,899両、現在の価値で約7億1千万円となる。これに既に支給したこの年分の切米や扶持米の米17,836石余(金にして13,720両)を加えると19,619両、これがお取り潰しになったときの最後の給料と退職金であった。現在の価値にして総計約23億5千万円が藩士約300名に分配支給された。

これらを単純に平均すると、一人分は約780万円ほどである。知行取りクラスであれば意外に高額が支給されていると思われるが、それまでの住居を引き払って京や大阪などへ出ていくことを考えれば、もとより十分とは言えなかつただろう。

(4)「金銀請払帳」の主な支出項目

▽内匠頭の菩提と御家再興の政治工作、そして上方と江戸との往復費用

「金銀請受帳」では最初の出てくる出金は、京都の柴野瑞光院に立てた亡君浅野内匠頭の墓のため、瑞光院への寄付として金100両で山を購入した。またこの時期、内匠頭の菩提を弔うための出金が金10両、金5両などがある。

こうしたお金の使い方から、内蔵助がこの時点では、この金を討ち入りに使うことなど全く考えていなかったことが察せられる。

また浅野家祈願所だった赤穂城下の遠林寺の僧祐海を江戸に遣わしての御家再興の政治工作などに、その路銀も含め65両を費やしている。望みは薄いとわかっていたはずだが、手元の軍資金を使い出来るだけのことはしていた。

なお、「金銀請受帳」でかなりの支出割合を占めるのが、上方と江戸を往復する旅費で、初期から終期まで全体に亘っており、その件数も多い。その総計は、金78両1分2朱と銀42匁になる。

赤穂城引き渡しの後、大石内蔵助に面会して同志となることを誓い、起請文を提出した総人数は93人いたが、その居所をみると赤穂城下の近在など赤穂藩の領地に、百姓・町人の格でそのまま留まったものが多い。また、江戸詰め旧藩士は、ほとんどそのまま江戸に留まったが、藩邸には住めないで、借宅して暮らさなければならなかった。

▽討ち入りの方針決定と神文返し、その段階の残金は200両

浅野内匠頭の弟・浅野大学を立ててのお家再興も、元禄15年7月18日、浅野大学への「閉門を赦免し、松平安芸守(広島藩主浅野綱長)へのお預け」との申し渡しにより、大学が赤穂浅野家の名跡を継ぐことはありえなくなった。9月1日には、譜代大名の永井直敬(なおひろ)に赤穂城が与えられ、33,000石で入部することになった。

この知らせは、7月24日、江戸の吉田忠左衛門から山科の大石に報ぜられた。この事態の急展開を受けて、同28日、大石は同志の面々に呼び掛けて、京都・円山にある安養寺塔頭の重阿弥という宿坊で今後の対策会議を開いた。ここには指導的なメンバーの原惣右衛門や小野寺十内などと急進派で上京中の堀部安兵衛など19人集まり、大石内蔵助は10月を期して同志の面々が江戸に下り、吉良邸に討ち入りをかけることを正式に表明した。

討ち入りの方針が決定され、赤穂など各地にいる同志に連絡を取るようになった。この役

は大高源吾と貝賀弥左衛門があたったが、意思堅固なものを選抜するため同志である神文(起請文)の署名部分を切り取り、それを封に入れ相手に渡し、それでも打ち入りに固執するものにだけ江戸下りを指示した。

江戸下りを指示する段階での軍資金残額は、当初 691 両(8,292 万円)あった軍資金総額がすでに 200 両(2,400 万円)を切っていた。同志それぞれに江戸に下る旅費を支給するとなると、それだけでも足りなくなる恐れがあった。これはそうしたことをすべて勘案した内蔵助の掛けであった。

3. おわりに／ホームページを活用促進しよう

以上、中途半端な項目列举の話題提供になってしまいましたが、お許してください。

なお、今回取り上げた事項以外にも、江戸下り後の大石内蔵助を始めとした赤穂浪人の居住場所や、討ち入り直前まで五月雨のごとく続いた脱盟者のこと、更に吉良上野介の在宅確認の情報入手のことなど興味を引く事柄も多々あります。

今回引用要約した著書以外にも、山本博文氏は「これが本当の忠臣蔵ー赤穂浪士うち理事件の真相」(小学館 101 新書)や「赤穂事件と 46 士」(吉川弘文館:敗者の日本史 15)などがありますので、この場を借りてまた話題提供できたらとも考えています。

今回の話題提供の発端は、上記「1. はじめに」で述べた川越初雁会・藤沢周平読書サロンメンバーでもあります岩堀・川越初雁会会長から次の呼び掛けがなされたことにあります。

「初雁会のホームページを担当している沢田さんと話し合っ、今度の散策会で両国本所の吉良邸に行くので赤穂浪士の討ち入りに関する話題をホームページに載せたらどうか。沢田さんもホームページの活性化について思いもあるようだから、沢田さんにも話しておくよ。」

これを受け、川越初雁会・広報の編集発行担当の松村さんにも入ってもらい、どういう形で情報提供したらよいか話し合うことになりました。

結果として4月4日(日)、岩堀さん宅に集まり、岩堀さん、沢田さん、松村さん、小生(圓山)の4人でホームページを巡り意見交換がなされました。

この場では種々意見が出ましたが、いずれにしろ川越初雁会の会員間のコミュニケーションの活性化がホームページを舞台に幅広くなされることを願い動くことになりました。今回の小生の話提供も、その一環としてさせていただきました。

最後に今は6月4日の春の散策会が開かれるよう、新型コロナウイルスの感染拡大が沈静化の方向へ向かっていくことを願い、当雑文を終わりにします。